

シカゴ万国宗教会議と明治初期の日本仏教界 —— 島地黙雷と八淵蟠龍の動向をとおして ——

嵩 満 也^{*1}

The World Parliament of Religion in Chicago in 1894 and Japanese Buddhism in late 19th Century

Dake Mitsuya^{*1}

The World Parliament of Religion in Chicago in 1894 was an unprecedented event that was taken place with over two hundred religious leaders who represented various religions including Christianity, Islam, Hinduism, Buddhism, and even new religious movements of the world. The Parliament was planed by liberal Protestant groups of the East coast. From Japan, four Japanese Buddhists attended to this Parliament and presented their papers on Buddhism to vast audience. Banryu Yatsubuchi, who was a popular preacher of Jodo Shinshu in Kumamoto, was one of the four attendants to this Parliament. In this paper, I investigated why Yatsubuchi decided to attend the Parliament and how he could realize it. I also take up some arguments among Japanese Buddhist as to the meaning of the Parliament. Then I discussed the influence of the Parliament upon Yatsubuchi's activity after his returning from the Parliament.

はじめに

1893年にシカゴで開かれた万国宗教会議は、世界中の歴史的宗教の代表者を一堂に集め会議を開くという、当時としては実に画期的なイベントであった。

万国宗教会議は、1893年5月15日から10月3日までのおよそ5ヶ月間にわたりシカゴで開催されたシカゴ万国博覧会の1大イベントとして計画された。シカゴ万国博覧会は、コロンブスのアメリカ大陸発見400周年を記念して催されたが、同時に12年前の大火からめざましく復興したシカゴの姿を祝うものでもあった。シカゴは、当時アメリカ中で最も経済成長を続けていた都市で、ホワイトシティーと呼ばれた人工の街を会場に開かれた。会場とシカゴの中心街は最新の高架式鉄道で結ばれ、会場には当時の技術力を結集した直径75メートルの世界初の大観覧車が建造された。また、そのような技術文明の粋を集める展示と並んで、シカゴ万国博覧会ではさまざまな文化的なイベントも開催された。その中でアメリカの自由主義神学者たちが中心となり、キリスト教諸派、ユダヤ教、ヒンズー教、イスラム教、仏教、神道、儒教、道教などの代表者に招聘状を送り、世界中の41の宗教からおよそ210名の代表者が参加して実現したのがシカゴ万国宗教会議である。

万国会議へは、日本の仏教界からは、真言宗の土宜法竜、天台宗の蘆津実全、臨済宗の釈宗演、そして浄土真宗の八淵蟠龍の4名が参加し、教派神道からは神道実行教の柴田礼一、日本キリスト

*1 国際文化学部教授

教からは小崎弘道が参加した。また仏教側の通訳として野口善四郎が、さらに臨済宗の釈の個人的な通訳として野口洋三が先の4名の僧侶とともに渡米し、既にアメリカに滞在し英語に堪能であった仏教徒の平井金三も現地で合流した。¹⁾

会議の実行委員長は、長老派教会（プレスビテリアン派）に所属する自由主義神学者ジョン・ヘンリー・バローズであったが、キリスト教主導で計画された会議であったことから、招聘を受けた日本の仏教界ではキリスト教の優越性を謳うだけのための会議となるのではないかと警戒し、参加をめぐり賛否両論が起こった。²⁾ しかし実際には、八淵蟠龍が帰国報告書（『宗教大会報道』）の中で「委員長バローズ氏などにあって大会の模様や、諸般の状項についてしさいに聞き、議事日程について一つ一つ質問せしに、予どもの予想とは大いに違う、すこぶる寛大自由な組織であります」と報告しているように、その運営はきわめて公平なもので、また「ただ各宗派が持つところの、特色の真理をこの議事日程の、目安によりて開陳するを寛容として、おのおの演述いたすこととなれば、真に万国宗教の一大公開であります」³⁾ と述べるように、まさに「万国宗教の一大公開」の機会となり、かえってキリスト教以外の宗教に注目が集まったのである。たとえば、この会議をきっかけに、「諸宗教の調和と普遍宗教」を説いたヒンズー教改革の指導者スワミ・ヴィヴェーカーナンダが、多くのアメリカ人の心を捉え、全米各地に支持者を得たことはよく知られている。また釈宗演とポール・ケーラスの出会い、鈴木大拙が渡米するきっかけをつくることとなったのである。

1. 万国宗教会議と明治初期の日本の仏教界

万国宗教会議へは、日本の仏教界から4名の僧侶が参加している。しかし、八淵蟠龍が帰国報告書の中で指摘しているように、いずれの参加者も宗派の代表として派遣されたものではなかった。

そもそもこのたび、日本仏教十二宗三十派の中から、万国宗教大会に臨席いたしたものは、臨済宗の釈宗演、天台宗の蘆津実全……（中略）、そして私とあわせて一行六人でした。この六人は、各人日本仏教を代表したとはいえ、みな一個の宗教家として、一個人の資格を持って出席したものなれば、いずれも一宗一派を代表して、本山から派遣されたものではありません。⁴⁾

このように八淵が述べる背景には、万国宗教会議をめぐり二転三転した日本の仏教界内での議論があった。その顛末について、『三寶叢誌』、『海外仏教事情』、『明教新誌』の記事を追いつつながらまず明らかにしておきたい。ちなみに、『三寶叢誌』⁵⁾ は浄土真宗本願寺派の島地黙雷、赤松連城や真宗大谷派の南条文雄、吉谷覺寿らが結成した結社「令知会」の月刊誌で、仏教についての論説・講義を掲載するだけでなく、仏教界全体、さらには国政の動向についても記事にしている。『海外仏教事情』は、普通教校（龍谷大学の前身）の学生が中心となり結成された海外宣教会が刊行した月刊誌で、海外での仏教伝道あるいは仏教事情だけでなく、翻訳を通して海外の宗教思想について紹介をしている。また『明教新誌』は大内青巒が主宰した隔日紙で、明治の仏教界の啓蒙誌的な役割を果たした新聞である。いずれも、日本の仏教界全体を視野に入れた言論活動を行った雑誌・新聞であるが、その活動の中心に浄土真宗の僧侶が深く関わっていた。

まず、シカゴ万国博覧会において万国宗教会議の計画があることを最初に報じているのは、明治24年（1891）6月の『令知会雑誌』（第98号より『三寶叢誌』と改題）第86号に晩潮道人の名で発表された「日本仏教家の出品を望む」という論説である。晩潮道人というペンネームは、浄土真宗本願寺派の僧侶島地黙雷のものと考えられるが、この論説では万国博覧会において物質文明の発展

だけでなく、精神文明すなわち宗教の発展を明らかにするための「宗教の博覧会」が計画されていることを紹介し、日本の仏教者の参加を呼びかけている。しかし、この記事に対する読者の反応は鈍かったようである。島地自身も、その時点ではキリスト教徒が仏教に対して強い偏見を懐いていることに加え、計画があまりにも壮大にも思えたことから、ただの話で終わるかもしれないとも考えていたようである。けれども、翌年になって計画の具体的な内容と日程が公表され、いよいよ実施される可能性が高くなったことをうけて、明治25年（1892）5月の『三寶叢誌』第98号の論説では「米国博覧会に就いて」という題を掲げてその計画を再度取り上げ、読者に対して万国宗教会議への関心を喚起している。

我曹は此宗教大会同の報を耳にする、日已に久しと雖も、独少しく遲疑を懷きし者あり、何となれば米国文化の發達、頗る長足の進歩に相違なきも、宗教者の偏固僻多き、他教徒と合同集会する事は、必ず甘従し能はざるべきを以て、所謂宗教とは、耶蘇宗内の新旧諸宗派を意味する（中略）疑惑を存したりしに、（中略）却って浅短の臆測なりしを、慚愧せざるべからざる也。⁶⁾

すなわち、万国宗教会議開催の報は以前より承知していたが、キリスト教が盛んなアメリカにおいて、宗教とはキリスト教のことであり、そこには仏教やイスラム教さらには儒教・神道などは含まれないと考えていたが、それは臆測にすぎなかったと反省の弁を述べた上で、

本邦仏教各宗教者は、此会同に列席せずとせば、其勢威の薄弱なる、希望の狭小なる、なんぞ将来海外布教の、大事業を望むべけんや、（中略）米国大博覧会の如きは、最も海外万国へ、我日本の仏教、大乘の妙旨を、広告開闢するの特別欄なりとす、書して姑く諸兄に問ふ⁷⁾

と、大乘仏教の妙旨を伝える日本仏教の海外に広める絶好の機会であると呼びかけている。

また、続いて明治25年（1892）7月の『海外仏教事情』第26号でも「シカゴ大博覧会に就て仏教者に望む」という論説が掲載され、先の『三寶叢誌』と同様にその意義が述べられ、仏教者の出席が呼びかけられている。また、同論説では「仏教の友愛慈悲の万教に超越する」ことを信服させ、「造物能造主を崇拜して自ら卑屈に甘んじる欧米人の宗教思想を開きて、真正なる因縁教諸法実相の諸由」を説くことなど、会議において明らかにすべき7つの要点を示している。

また『明教新誌』では、記事としては早くからたびたび万国宗教会議の開催について取り上げているが、明治26年（1893）1月の社説で、やはり日本からも参加すべきことが主張されている。ただ広く宗教家一般に対して参加を呼びかけているところに、僧侶を中心として刊行されていた前2誌との視点の違いも窺われる。

もちろん、当時の宗教関係の雑誌や新聞がすべて積極的に参加を呼びかけたわけではない。神道系の雑誌で国家主義を喧伝した『大道叢誌』や京都の地方紙である『京都新報』（後の京都新聞）などでは、この大会の目的がキリスト教による他宗教への威嚇にあるという論陣を張り、仏教界も巻き込んで参加をめぐり賛否両論がたたかわされた。

このような状況の中、特に各宗各派が日本の仏教界全体の代表者を共同で派遣すべきであると強く主張したのは、浄土真宗本願寺派の島地黙雷であった。

周知のように、島地は明治5年（1872）に赤松連城らと欧州視察を行い、欧州で見聞した「信教の自由」という立場から、同年に明治新政府により設置された大教院に対する批判の建白書を欧州から提出し、その後の浄土真宗の大教院からの離脱を主導した人物である。島地は明治25年（1892）

10月の『海外仏教事情』第29号に寄稿した「大乘教西漸の機運」と題した論説の中で、シカゴで開催される万国宗教会議について言及し、

委員長「ジョン、ヘヌリ、バロース」氏よりは南條博士及び我曹に向て懇切なる招状を贈來し我曹より蘆津土岐釈伊達柴田等神仏知友諸氏の名字を報道したるに右の各位へも夫々招状を寄贈せり⁸⁾

と述べている。この記述から分かることは、万国宗教会議の実行委員長より、日本仏教界の中で最初に参加への打診があったのは、島地と南條文雄であったということ。そして、島地を通して天台宗の芦津実全、真言宗の土岐法竜、臨済宗の釈宗演ら実際に会議に出席した日本仏教界を代表する僧侶が紹介されているだけでなく、神道実行教の柴田礼一を紹介したのも島地であったということである。どのようなかたちで二人が知り合ったのかは確認できていないが、島地の幅広い人脈関係が窺われる。また、その後もバロースは、島地を介して日本仏教界からの参加者との連絡を取っていたようで、『三寶叢誌』第105号の記事には、島地がバロースから各宗の門主・管長等への招待状を配送していることが報道されている。

島地が、いつごろこのバロースからの照会の手紙を受け取ったのかについては明確ではないが、明治24年(1891)6月の『令知会雑誌』第86号の論説でこの会議について言及していることから、それ以前のことと考えられる。ただ、その後およそ1年間は大きな動きは見られない。このことは、明治25年(1892)5月の『三寶叢誌』第98号誌上で島地が、バロースらの計画については共鳴したものの、会議の目的について「疑惑」が存したことから積極的な関与について躊躇していたことを告白していることから、その理由もおおよそ推察されるが、バロースらの計画が具体的になり「疑惑」を晴らした島地は、それ以降日本仏教界からの会議参加実現に向けて精力的に活動する。

その後の島地の動きについて一瞥しておく、まず明治25年(1892)6月26日付けの『明教新誌』には、島地が仏教各宗派の連合体である各宗教会に対して、委員を選定し、まず演説起稿について協議をはじめよう提案していることについての記事が掲載されている。また、同年10月の『海外仏教事情』第29号「大乘教西漸の機運」では、現在欧米に伝わっている仏教は主に小乗教であるが、理性的で理論的な欧米人を満足させることができるのは大乘仏教において他はなく、「大乘教弘伝の要務を荷負する者は我邦僧侶の本分」であり、万国宗教会議を大乘仏教の妙旨を広める絶好の機会であると力説している。

また島地は、各宗各派が歩調をそろえて準備をした上で、代表者を派遣すべきであると提案している。このことについて島地は、先に引用した明治25年(1892)5月の『三寶叢誌』第98号誌上の論説の中で、

我曹は如此の希望と、恐怖とを懷くを以て、本年定期の仏教各宗協会の会同に向て、各管長は之が委員を選定し、以て實際有用の準備に、着手せられん事を建議したれば、早晚必ず此等の事、一定の決議に至るべきなり⁹⁾

と、既に日本仏教界の連合体である各宗協会に対して建議していることに触れている。また、同年6月26日付の『明教新誌』上には、前日の各宗協会定期大会においてこのことが議論されたことが報道されており、同年7月4日付の同誌には、「島地黙雷師が各宗協会の定期大会へ提出せられたる米国シカゴ府に於いての演説は種々協議の末演説起稿委員其他取調委員三名を選出することとなれり」¹⁰⁾という記事が出ている。すなわち、島地の提案が受け入れられ、発表原稿の起稿委員の

設置が認められ、いよいよ日本仏教界の連合体である各宗協会として代表を派遣することで動き出したのである。ただ、「種々協議の末」と報道されるように、その過程では賛否両論の意見があったようである。

さらに、彼自身が浄土真宗本願寺派の代表者として参加することを本願寺派の代表会議である集會に提案し承認を得た上で、会場で配布する英訳の印刷物と渡航費用4千ドルについてもすべて本願寺派が負担することが集會で認められたことが、明治25年（1892）12月の『三寶叢誌』第105号誌上で報じられている。¹¹⁾

また、この記事の中で興味深いのは、島地黙雷がフランス開教のために、アメリカよりそのままフランスに向かい2年間滞在するという計画を同時に提出し、その費用1万2千ドルが可決されていることである。

浄土真宗本願寺派は、明治維新以降多くの若者を海外へ留学させている。その嚆矢は明治5年（1872）に欧州の宗教事情を視察するために派遣された、島地黙雷、赤松連城の渡欧である。その後、明治8年（1875）には、今立吐醉がアメリカに派遣され、明治14年（1881）には北畠道竜がアメリカとヨーロッパに外遊し、そして明治15年（1882）には藤枝沢通がフランスに留学し仏教学者シルバン・レビーのもと近代的な仏教学を研究をした。また、明治23年（1890）には高楠順次郎がイギリスとドイツへ留学し、マックス・ミュラーらのもとでサンスクリット仏典の研究を行った。

島地がこのようにアメリカを経由してフランスへ渡航しようとした背景には、前年の明治24年（1891）2月に、パリのギメ博物館で、渡仏中の真宗仏光寺派の善連法彦や真宗誠照派の小泉了諦らが親鸞の木像を安置し報恩講を勤修し、そこにカルメ大統領や政治家のクレマンソーあるいは画家のドガ等400名の参列者があったというニュースが伝えられたことがあったと考えられる。ただ、島地が視察あるいは留学ではなく、開教という目的でフランスに赴こうという計画を立てていることは、それまで日本の仏教界が、海外諸国あるいはキリスト教に対して、受け身の姿勢で対応していたことからの思想的な転換を象徴するものとも言える。

2. 万国宗教会議と八淵蟠龍

このように浄土真宗本願寺派内では、代表として島地黙雷を万国宗教会議へ派遣することで合意なされていたが、結局島地は同会議へ出席することはなかった。その理由については、健康上の理由以外は報道されておらず、果たして何か他の理由があったのかはさだかではない。かなり唐突な感否めないが、結局宗教会議出席とフランス渡航は実現しなかった。ちなみに、島地と並んで最初にバローズから照会があった、真宗大谷派の南條文雄は早い段階から亡き父の法事という理由で出席を断っている。

一方、翌年の明治26年（1893）6月に開かれた各宗協会の定期大会では、協会として代表者を派遣することが否決され、結果的に前年の合意が覆される事態となった。有志による再度の議決提案が行われたが結果は変わらなかった。このように万国宗教会議への出席をめぐるのは、決定が二転三転し、既に各宗派において候補者としてあがっていた人たちは、直前になって出席を断念するようになってまったく一個人の資格において出席するかの決断を迫られることになったのである。

否決理由・背景については、いくつかの点が考えられる。一つは、既に指摘したように、もともと会議開催の目的をめぐるのは当初から不信感があり、そのことが各宗協会での合意を難しくした

と考えられる。また、当時仏教に関心を持った多くの外国人が日本を訪問していたが、その中にはこの万国宗教会議の計画に対して批判的な者もあった。

たとえば、明治26年（1893）6月8日付けの『明教新誌』には、元イギリス海軍軍人で、仏教に関心を寄せていたG・ジェームズという人物の談話が掲載されている。この記事では、シカゴで開催される万国宗教会議へ日本の仏教徒として参加したいという者は多いが、一方でたとえ日本仏教徒の代表者を出席させても、多勢に無勢であり、議論しても無意味であるという者もいるが、あなたはと思うかという質問に対してジェームズは、「余が一己の考えにては、左迄、利益なしと思ふ」と、あまりその意義を認めていないことが報道されている。このような来日外国人の発言は、不平等条約の改正が国内で急務の課題となっていた当時の日本人にとって一定の影響力があつたと考えられ、仏教界の世論形成にも影響を与えたと考えられる。

しかし、一番大きな障害は経済的負担の問題であつたのではないだろうか。明治維新により、それまで与えられていたさまざまな特権的地位を奪われた多くの仏教寺院は、その存亡も含めさまざまな困難に直面していたが、特に経済的には困窮していた。日本仏教界が共通して直面したこのような明治維新がもたらした危機は、一方で江戸時代には全く見られなかった宗派間の連帯の機運を生み出し、たとえば各宗協会などの結成へとつながった。しかし、経済的な困難に直面していた多くの宗派にとって、派遣のための費用は大きな負担であつた。特権的な寺領などではなく門徒の喜捨に経済的な基盤を置いていた浄土真宗は、その点では経済的な余裕があり、宗派として島地に対し費用の負担を約束することができたが、他宗派では必ずしもそうではなかつたのである。その結果、それぞれの参加者は自ら渡航費について何らかのかたちで工面しなければならなかつた。実は、このことは浄土真宗本願寺派の僧侶として万国宗教会議へ出席した八淵蟠龍の場合も同様であつた。宗派は島地に対して認めた渡航費を八淵に対しては与えなかつたからである。いずれにしても、各宗派の経済事情が、合意の大きな障害となつたと考えられる。

しかし注目されるのは、一方で代表者を送ろうとするグループが、宗派内だけでなく、宗派を超えて連帯し参加者に対する経済的な援助を行おうとしたことである。たとえば、明治26年（1893）7月6日付けの『明教新誌』には「土岐法龍師米国市俄高宗教大会へ臨場賛助義捐金勧募叙」という一面広告がなされ、渡米する真言宗の土岐法龍に対する募財がよびかけられている。また、浄土真宗本願寺派内でも『仏教海外事情』にも数度にわたって「米国シカゴ府世界博覧会施本費寄附金報告」が広告され、全国各地から英訳施本のための義捐金が寄せられている。また、4名の参加者の送別会や打合会の広告が出され、参加費を徴集しているが、これらも渡航費用の一部に当てられている。このように超宗派的な連帯が生まれたが、それを支えたのは地方の有志や結社等であつた。

では、八淵蟠龍はどのような経緯から万国宗教会議へ参加することになったのだろうか。

実は、資料的には八淵について知る手がかりはほとんどない。九州の熊本で生まれ、普通教校の学生が中心となって結成した海外宣教会の会員の中に名前が見える以外は、中央でどのような活動をしたのかは不明である。ただ、地元の九州で布教活動を活発に行っており、博多の七里恒順や熊本の加藤恵証と並んで浄土真宗本願寺派の僧侶と九州内の有志により結成された九州仏教倶楽部の有力メンバーとなり、同倶楽部などの経済的援助を受けて万国宗教会議へ出席したようである。

この九州仏教倶楽部は、多くの会員を集めて活動をしたようで、明治24年（1891）12月18日付けの『明教新誌』には、仮本部を京都堀川本願寺前へ置き、支部を大阪土佐堀に開設したことを報じ

ている。また、著名な会員として西郷従道や頭山満などの名前をあげ、鹿児島、熊本、佐賀の有力者や資産家が多く加入していることを伝えている。

このような仏教の結社は、明治期のはじめごろから東京・京都・大阪などで多く結成され、会員からの会費によりたとえば『令知会雑誌』、『明教新誌』、『反省会雑誌』、『海外仏教事情』などの機関紙誌を刊行し、仏教界の啓蒙活動や動向を報じていた。このような結社は次第に地方でも生まれ、九州仏教倶楽部などが結成された。そして、特に九州においてこのような仏教結社の活動が活発になったのは、キリスト教の伝道活動に対抗することが大きな目的であったようである。

このことに関連して、明治26年（1893）10月12日付けの『明教新誌』に掲載された「九州宗教の近況」という記事は示唆的な内容を含んでいる。記事では、記者が九州から上京した人物より取材した内容として、近年熊本では仏教・キリスト教両教の活動が非常に活発であり、キリスト教は熊本英学校が中心となり、仏教では浄土真宗の東肥教校や曹洞宗の鎮西中学林、さらには九州学院が中心となり教育・伝道活動を展開していること。その中で、もっとも有力な機関誌は八淵蟠龍が主幹をし、中西牛郎が主筆をしている「国教」であると伝えている。また、福岡の、柳川においてはキリスト教が盛んであるが、博多では七里恒順の感化によりキリスト教はふるわないこと、大分でも仏教が優勢で、宮崎では仏教と神道が並立していることを伝えている。また、鹿児島では浄土真宗が禁教であったことから、キリスト教が優勢であり、外交の地長崎においてはキリスト教が盛んであるが、同時に同じくらい仏教も盛んで拮抗していると報じている。

このように、九州ではキリスト教の伝道活動に対抗するための連帯が、九州仏教倶楽部の設立に結びついたと考えられるが、八淵蟠龍の万国宗教会議への出席を経済的に支えたのが同倶楽部を中心とした九州の仏教徒有志であったようである。

そのため、八淵蟠龍は横浜からバンクーバーへ到着してすぐに、自分が主幹する雑誌「国教」に「遙に英領瓦港より九州の同志青年に寄す」と題して寄稿している。ここではそれを転載した明治26年（1893）8月の『海外仏教事情』第37号によりながら、八淵が万国宗教会議に参加しようとした意図について考えてみたい。

まず八淵は、「北米の天地を觀るの幸福を得たる事。偏に諸子の愛顧と仏祖の恩恵に在りと感銘斜ならず。実に謝するに言なし」¹²⁾と、経済的な支援を惜しまなかった同志に対して謝辞を述べている。そして、万国宗教会議が

釈尊出世以来仏縁疎く仏教に就いては不見不聞とも云つべき彼の泰西人、今や機縁純熟、科学哲学の進歩と共に我仏教を迎へんとするの時運¹³⁾

と、西洋の人々が科学と哲学の進歩と共に仏教を受容する機縁であると捉えている。そして、注目されるのは、八淵が

密教には真言之を掌り。顕教には天台之れを握り。自力中の自力を以て唱導するには禪之を施し。他力中の他力を以て平民的に實際に之を施すには真宗之に応じ、彼の欧米基督教家の兄弟に仏陀の慈教を施すはあに夫れ愉快ならずや¹⁴⁾

と、宗派間の垣根を越えて仏教を伝えようとする態度とともに、「欧米基督教家の兄弟」とまで呼んでいることである。そこには宗教家として、他宗教を同等に扱おうという態度が見られる。このことは幕末から明治はじめにかけて、キリスト教を排除するための対策に苦心した日本の仏教界の態度からは考えられないことである。先に触れたように、八淵が活動していた九州では仏教とキリ

スト教が伝道活動においてしのぎを削っており、八淵はその先鋒に立っていたことを考えると、本心からそう思っていたかどうかは分からないが、九州の同志青年に対してそう呼びかけていることは、少なくともそのような期待をもって会議に参加していた。

このような八淵の寛容な態度は、幕末・明治初めから明治20年代にいたる間に起こった、日本仏教界の対キリスト教あるいは対西洋世界に対する自信回復に裏打ちされたものである。すなわち、明治初めには「破邪」という態度で臨んでいたキリスト教への対応も、明治10年代の後半になると、仏教思想が西洋の科学的視点から見てもかえって合理的であるという主張へと転換し、さらに明治20年代になるとそれが国粹的な思想と結びつき自信回復とともに外へ積極的に出ようとする態度へとつながりつつあった。たとえば、先に触れた島地黙雷のフランス開教の提案にも、キリスト教排除のための受け身の対策ではなく、逆に積極的に西洋のキリスト教世界へ進出するという意識の変化が明らかに見られる。また八淵が先の言葉の後に、「就いては諸君に望むところは将来の継続なり」と呼びかけ、「第一諸君に需るは宗教の熱心力と先輩祖師に対するの義務心と百折不撓の志望とを堅くする事。學術を練習し。英書を読み。英文を綴り。英語を活用する事」と、海外伝道の準備を進め、自らの後に続くように呼びかけているのも同じ脈絡で理解することができる。

3. 帰国後の八淵蟠龍の動向

大会での八淵蟠龍の発表内容の検討については別の機会に譲りたいが、八淵は特に浄土真宗について発表したわけではなく、“Buddhism”という題で主に華嚴経などが説く大乘仏教の教説について述べている。このことは、もともと各宗協会で演説起稿委員と取調委員を選出し、日本仏教界の代表として大乘仏教の原理を明らかにするために必要な内容を検討し、その概要が『海外仏教事情』第34号に「宗教大会発表項目」として公表されているが、その後渡米直前までに4名の出席者の間で分担したのである。また八淵は、会議の最終日に日本からの参加者を代表して挨拶をしている。

八淵は帰国直後、本願寺派の門主に対して帰国報告をしているが、その中でシカゴにおいて日本の仏教界から参加した4名の講演が好評を博したことを述べた後で、今や「海外布教の時機到来」とであると提言したということが、明治27年（1894）1月22日付けの『明教新誌』に掲載されている。実際、その後本願寺派は、明治31年（1898）にハワイ開教に着手し、翌明治32年（1899）には北米開教を開始している。しかし、本願寺派の海外開教の中心は、アジア侵略の度合いを深める日本の国策に追随したアジア開教に大きな比重が置かれるようになり、島地あるいは八淵が提唱したキリスト教世界への海外伝道は、ハワイ・北米に形成された日系人移民のコミュニティの枠を、第2代ハワイ開教監督を30年以上にわたり務めた今村恵猛の開教活動¹⁵⁾を除いて超えることはなかった。その意味で、明治20年代以降の日本仏教界の自信回復は、積極的に西洋のキリスト教世界へ進出するという意識の変化を現実化することにはつながらなかった。

万国宗教会議終了後の一般的な評価としては、明治27年（1894）1月10日付けの『明教新誌』に、仏教改革のオピニオンリーダーの一人であった中西牛郎の意見として次のような記事が掲載されている。少し長くなるが全文を紹介したい。

万国宗教大会の結果中西牛郎氏万国宗教大会の結果を論じて

第一 宗教大会は無神論若しくは非宗教者に対して宗教の大勢力を示したること

- 第二 宗教大会は宇内諸宗教者の平和的交通を開きたること
- 第三 宗教大会は是迄文明世界に知られざる諸宗教の価値を知らしめたること
- 第四 宗教大会は諸宗教徒頑固の見を破り力ありしこと
- 第五 宗教大会は第十九世紀宗教の傾向と其需要せらるべき点とを世界に明にしたること
- 第六 宗教大会は是まで我こそ世界宗教の盟主なりと自ら傲慢する耶蘇教の地位を剥奪して之を彼の価値ある宗教に分ちたること
- 第七 宗教大会は将来統一宗教の基本を開きたること
- 第八 宗教大会は宗教相互の關係に於ける真理を一般学者に知らしめたること
- 第九 宗教大会は世界平和進歩の源は宗教に在ることを天下に知らしめたること
- 第十 宗教大会は比較宗教学に最大進歩を与えたること¹⁶⁾

中西牛郎は、万国宗教会議の結果、宗教が全体として文明社会にその存在を示すことができただけでなく、諸宗教者が平和的に交流をできたことを評価している。また、結果的に世界の宗教中におけるキリスト教の地位の相対化が起こったと指摘しているが、これは万国宗教会議の開催以前に日本の仏教界が懐いた懸念が杞憂に終わり、むしろ仏教側の自信回復につながったことを物語っている。また中西は、将来宗教が統一される可能性が万国宗教会議により開かれたと評価しているが、このことは中西が明治23年（1890）に『組織仏教論』を著し、仏教の統一的理解を論じたことと軌を一にするものとして会議の成果を捉えているとも言える。すなわち、当時の日本仏教界における仏教改革派にとって、万国宗教会議の成果は高く評価されたのである。しかし、その一方で明治27年（1894）4月22日付の『明教新誌』には「万国宗教大会議の結果、異様の現象は北米シカゴに於て起これり、仮に名づけてシカゴ教といふ」¹⁷⁾として、世界の宗教の優れた真理を総合調和して一宗教を組織しようする風潮をシカゴ教と名づけ、それを甚だしい妄想として指弾する意見が掲載されている。

ところで、八淵蟠龍は帰国後に同じ『明教新誌』上に論文を寄稿しているが、その題目は「仏教護国策」というもので、タイトルだけ見ると一見内容は万国宗教会議とは全く無関係のようにも思われる。しかしその冒頭において、八淵は会議出席を機縁として見聞したことに基づいて宗教と国家との関係を考えてみたいと言っているように、その内容は万国宗教会議での経験が反映されているのである。

この「仏教護国策」という論文は、明治27年（1894）4月8日から4月20日まで数度に分けて『明教新誌』上に掲載されているが、全体を通して八淵は日本仏教界を振興するについては、1) 軍人布教の基礎の確立、2) 移住布教の基礎の確立、3) 家族的仏教の基礎の確立、ということについて論じている。軍人布教は、その後戦前の日本の仏教教団にとっては重要な社会的役割となっていくが、もともと聖職者が兵士のために従軍するチャプレンはキリスト教においては古くから行われていた。アメリカでも独立戦争以来従軍チャプレンが存在していた。八淵がアメリカでの見聞をもとに「軍人布教」を日本の仏教の国家との関係における役割として提唱する背景には、アメリカにおける従軍チャプレンの存在があったと考えられる。そして、実際に日本の仏教界では明治27年（1894）の日清戦争において「従軍布教」として、軍隊に僧侶が従軍するようになる。その意味で、この八淵の提言はその後の日本仏教教団と国家との関係の一つの道筋を示している。

また移住布教については、たとえば浄土真宗本願寺派は、すでにロシア沿海州での開教事業を明

治19年（1886）に始めているが、その対象は現地に在住していた日本人移民への布教であった。しかし、台湾、中国本土、朝鮮半島、満州などへのアジア開教が本格化するのには、日清・日露戦争以降であり、またハワイへの正式開教は明治31年（1898）であり、アメリカ本土へは明治32年（1899）である。八淵が「移住布教」と言うときに念頭にあったのはアジアにおける日本人移民だけでなく、渡米途中に寄港したハワイにおける日本人移民も含んでいたが、「人種競争」において宗教が重要な役割を果たすと指摘しているが、このこともその後の日本の仏教教団と国家との関係をやはり予見した提言となっている。

家族的仏教については、まず八淵は、仏教が人間における3つの重要な時期、すなわち誕生・結婚・死の内、死についてのみ葬儀法事として感化を及ぼすのみで、誕生・結婚については何ら感化を及ぼしていないのに対して、キリスト教ではこのすべてについて感化を及ぼしていることを指摘し、仏教が「老人的の宗教」から「青年的の宗教」となり、「失望的の宗教」から「希望的の宗教」へとなることを主張している。このことは、キリスト教が人間における3つの重要な時期にすべてかわり感化力を発揮していることを、八淵がアメリカで見聞したことにもとづいて主張されていると考えられるが、個人・家族・国家のすべてに関係して感化力を発揮すべきであるというこの提言も、やはりその後の日本の仏教教団の活動の方向性を予見したものである。

先の中西牛郎の万国宗教会議に対する評価と、実際にその会議に出席した八淵蟠龍の提言の視点は明らかに異なっている。そのようなずれが当時の日本の仏教界のどのような意識を反映しているかについては興味深いテーマであり、今後の課題の一つとしたいが、万国宗教会議終了後の『三寶叢誌』、『海外仏教事情』、『明教新誌』の紙誌面は、次第に国粹的論調が強まると同時に従軍布教の報告などの記事が多くなる。

シカゴで開かれた万国宗教会議には、欧米社会における自由主義神学の台頭やコスモポリタニズムの流行などを背景にして開催され、世界各国41の宗教からおよそ210名もの宗教者が参加した。日本仏教界からは4人の僧侶がこの会議に参加したが、それは明治20年代の日本仏教界全体の自信回復に後押しされるかたちで実現した。すなわち、明治維新以来、排他的・防衛的姿勢でキリスト教に対応していた日本仏教界が、キリスト教に対して仏教の思想的な優越性を主張しはじめる明治20年代という時代状況の中で可能となった。また、最終的に渡航費を工面したのはそれぞれの宗派の有志たちであった。この会議に参加した浄土真宗本願寺派の僧侶八淵蟠龍のこの会議に対する評価とその後の活動は、その後の日本仏教界と日本政府との関係を暗示するものであり、そこに万国宗教会議には見られたコスモポリタニズム的な精神はほとんど見られないと言わざるをえない。もちろん、そのような精神をうけた日本仏教界の動きとして、たとえば、サンフランシスコに本部を置いていた浄土真宗本願寺派の北米仏教会により、1915年のパナマ万国博覧会のイベントとしてサンフランシスコで開催された「世界仏教徒会議」、あるいは明治36年（1903）に大阪で開かれた第5回内国勸業博覧会での万国宗教会議の開催計画¹⁸⁾などが挙げられるが、その後そのような動きはほとんど見られなくなった。

注

- 1) また一行は、大会本部に「一切経」を寄贈し、さらに清沢満之著『宗教哲学骸骨』、黒田真洞著『大乘仏教大意』、加藤正著『真宗問答』、赤松連城著『真宗大意略説』、西本願寺海外宣教会編『真宗綱要』、松山栄太郎著『四十二章経』、新居日薩著『日蓮宗大意』の英訳を持参し、会場で配布した。
- 2) キリスト教内部でも、この会議への参加をめぐり同様に賛否両論が出され、英国国教会やギリシャ正教は、この会議の趣旨に賛同せず不参加となった。また、ローマ・カソリックでも意見が分かれるなど、キリスト教側に不協和音が生じ、委員長のパローズをはじめ実行委員はその調整に大変苦勞しつつ、まさに画期的なこの会議の実現にこぎ着けたのである。
- 3) 常光浩然『北米仏教史話—日本仏教の東漸』仏教伝道教会、22-25頁。
- 4) 同上、22頁。
- 5) 『令知会雑誌』という雑誌名で97号まで刊行され、98号より『三寶叢誌』と改題された。
- 6) 『三寶叢誌』第98号、2-3頁。
- 7) 同上、3-4頁。
- 8) 『海外仏教事情』第29号、5頁。
- 9) 『三寶叢誌』第98号、4頁。
- 10) 明治25年6月26日付『明教新誌』、8頁。
- 11) 『三寶叢誌』第105号、44頁。
- 12) 『海外仏教事情』第37号、7頁。
- 13) 同上、8頁。
- 14) 同上、8頁。
- 15) 今村恵猛の開教活動については、拙論「初期ハワイ本願寺教団と今村恵猛」(『国際社会文化研究所紀要』第11号所収)を参照していただきたい。
- 16) 明治27年1月10日付『明教新誌』、7頁。
- 17) 明治27年4月22日付『明教新誌』、7頁。
- 18) 明治29年3月の『反省会雑誌』第11年第3号に、第五回内国勸行博覧会の際に京都で万国宗教会議を開催することが提案されている。